ありながら水戸藩主の侍講を務め、後世に残る
集者、記録者として、貴重な報告書、紀行文な
人々、ゆかりの地などを取材した。（表記は満年齢）

長久保赤水 特集

伊能忠敬に先駆けて日本地図を編集
特に秀でていた情報収集と編集能力

生い立ち

長久保家のルーツは大分の大友氏とされる。戦に敗れて逃れ、静岡県駿東郡長泉町で長久保城主となった。ここで長久保を名乗って何代か続いたが、北条氏綱に滅ぼされてしまい、最終的には赤浜で帰農した。

赤水の俗名は源五兵衛。一七一七年（享保二）、父・善次衛門、母・繁の長男として生まれた。父は次男、母は日立出身で、徳川光圀の乳母を出した名門、長山家の出だった。母は学問の素養があり、赤水に砂浜などで読み書きを教えた。八歳のときに父が赤浜の北原に分家したが、弟、母と相次いで亡くなり、継母・咸（かん）が来た。しかし十歳のときに父も亡くなり、幼くして肉親をすべて失った。

継母の咸は父から「源五兵衛の面倒を見てほしい」と頼まれていたこともあり、北茨城の実家には戻らず、赤水と二人で農業をしながら家を守っていく。農家の出ということもあって学問には無縁の咸だったが、赤水の学問に対する向上心に理解を示し、温かく見守っていくことになる。

松岡城下に医師・鈴木玄淳による私塾があり、赤水は母の勧めで十三歳のころから、そこに通い始める。当時、農民が身を立てるには学者か医者ぐらいだった。そこで木皿村（現在の北茨城市磯原町）の豪農の息子、柴田平蔵と出会い、貴重な書籍を借りながら勉学にのめり込んでいく。玄淳の塾は近隣から向学心のある少年たちが集まって儒学を学んでいて、お互いが切磋琢磨して、のちに松岡七賢人（七友）と呼ばれるようになる。

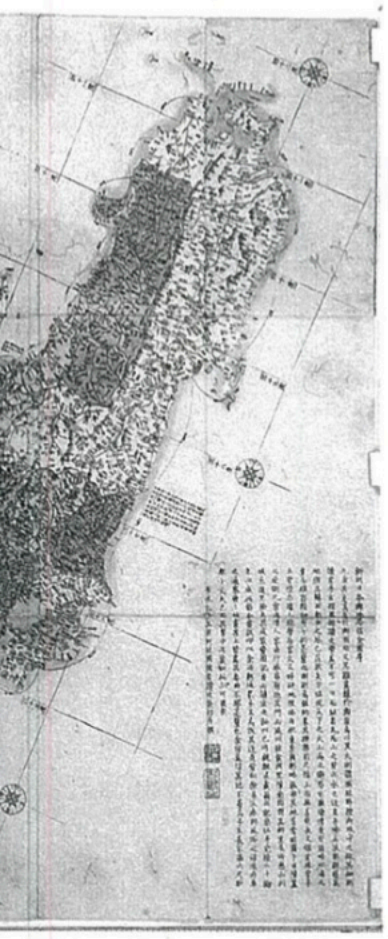
赤水図

「赤水図」と呼ばれ、江戸時代にベストセラーになった「改正日本輿地路程全図」は三十四歳のころから着手し、約三十年の歳月をかけて六十二歳のときに完成させた。そのきっかけは、いわきの寺「論語古訓」の講義をするために招かれたときに、道に迷ってしまったことだと言われている。そのときに、細かい情報の必要性を痛感し、地図を描き始めたという。さまざまな資料を集め、家の前を通る旅人を呼び止めて話を聞くなどして情報を蓄積し、街道、宿場、地名などを書き込んでいった。

地図づくりで大きかったのは、水戸藩が『大日本史』を編纂するために置いた彰考館の、諸藩が発行した地図を模写したこと。さらに天文学を学んで緯度と経度を出し、障子を使って正確な地図づくりをめざした。自らも東北、新潟などを旅して実地検証をし、地図の精度を高めていった。

地図は折りたたみ式で書き込みが多く、さまざまな情報が網羅されている。現在のいわきの部分を見てみると、海上に龍燈の説明があり、地名では「久濵」（久之浜）、「小名」（小名浜）「久保田」（窪田）などがあり、川名は「カマト川」（鎌田川、現在の夏井川）「サメ川」（鮫川）が確認できる。さらに「改訂版の第二版では、浅間山や阿蘇山に煙を立ち上らせ、那智の滝も書き込んでいる。

赤水が「地図を作ろう」と思い立ったとされる、いわきの寺での講義は一七四八年（寛延元）で三十一歳のとき。ただ、記録には「某寺」とあるだけで特定されていない。その翌年にも小名浜の観日亭で「左氏春秋」を講義したという記録が残っている。



赤水と旅

赤水は生涯に大きな旅を三回している。まず、四十三歳のときに東奥（東北、新潟）、五十歳のときに長崎、そして五十七歳のときには京都、大阪。なかでも興味深いのは長崎で、北茨城の野口家の船「姫宮丸」が嵐に遭って安南国（現在のベトナム）まで流され、生きて帰ってきた四人の乗組員（二人

長久保赤水が生まれた家には「誕生地」という石碑があります。その家は長久保家が赤浜に来て最初に住んだ家ですが、本家は江戸時代に水戸へ転居してしまったため、一族が順番に屋敷跡を守っています。現在住んでいるのは長久保源蔵さんです。赤水の父・善次衛門はその家の次男で、赤水が七歳のころに分家して家を移りました。転居したのは、私の家の前にある家で、六十一歳までそこで農業をしながら学問に励んでいました。

長久保家は戦国時代、静岡県駿東郡裾野町に城を築いて、部下を養っていました。ところが東に北条、北は武田、西は今川に囲まれていて、最終的には小田原の北条に攻められて船でこちらに逃げてきました。上陸したのが小名浜だったそうです。

その後、渡辺町泉田にある岡部城、勿来の窪田城、北茨城の車城などを経て、赤浜で帰農しました。関ヶ原の戦いが終わり、流浪の大名ではだめだと思ったのでしょう。それが一六〇五年（慶長十）です。

赤水は六十歳のときに、六代水戸藩主・治保公の侍講となり、八十歳まで、江戸小石川の水戸藩邸で暮らしました。侍講が終わったあとも、水戸光圀が始めた「大日本史」の地理志を担当して、仕事をしていたのですが、体を心配した子どもたちから「早く帰って来

長久保 和良さんのはなし

肉親が早くに亡くなったので健康にはとても気を遣っていた